国土社の新作童話

やでもか女医先生

じょいせんせい

鶴見正夫・作／田中槇子・絵

■著者紹介　鶴見正夫

1926年新潟県に生まれる。早稲田大学政治経済学部卒業。著書は詩集『日本海の詩』(理論社)、『駅長とうさん』『最後のサムライ』『鮭のくる川』『あめふりくまのこ』(以上国土社)、『かくされたオランダ人』(金の星社)、『長い冬の物語』(あかね書房)、『ブルドーザのガンバ』(偕成社)など。ほかに童話が多数ある。

＊現住所＝〒167
東京都杉並区松庵3－24－2

■画家紹介　田中槇子

1942年東京に生まれる。武蔵野美術大学商業デザイン科卒業。絵本『ノアのはこぶね』(聖パウロ女子修道院出版部)、さし絵に『鮭のくる川』(国土社)、『先生のけっこんしき』(ポプラ社)、『二人のサンタクロース』『もりのぼうしやさん』(以上偕成社)など多くの仕事がある。

＊現住所＝〒183-03
東京都東久留米市学園町1－14－34

913

鶴見正夫
やでもか女医先生
国土社　1977
104P　22×19cm（国土社の新作童話2）

基本カード記載例

やでもか女医先生〈国土社の新作童話2〉

著　者　鶴見正夫　©1977
1977年1月20日初版印刷
1977年1月25日初版発行
発行者　長宗泰造
印刷所　厚徳社
発行所　国土社
〒112 東京都文京区目白台1丁目17－6
電話 東京943・3721／振替 東京6-90631

落丁・乱丁の本はお取りかえします。〈検印廃止〉

やでもか女医先生

鶴見正夫・作／田中槇子・絵

山のリツばあさん

山あいの家いえをとじこめるように、雨雲が低くたれこめている。めずらしいことではない。梅雨の季節になると、山に住む人びとは、くる日もくる日も、まるで、こい霧の中でくらしているようなものである。

リツばあさんの住む村も、そんな村だ。

六月すえの夕方、降りつづいた雨がようやく晴れ、西の空にほんのりとあかね色の光がさしそめるようなとき、リツばあさんはきっと、村の診療所の二階から、遠い山のかなたを見る。

あたりをとじこめていた雲が風に流され、しだいにうすれ、山やまは、ぼかした墨絵のようにうつくしい。近くの木ぎのみどりは、雨に洗われ、きゅうに色こく、うきあがって見える。

「ああ、もう夏だ。」

リツばあさんは、小さな声でつぶやく。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

去年も同じころに、山のかなたの空を見ながら、そうつぶやいた。おととしも、そしてその前の年も……。なんのこともないふつうのことばなのだが、リツばあさんにとっては、深い思いがこもっている。

（あの子、ことしの夏は帰ってくるだろうか……。あの女の子は、どうしているだろう。）

リツばあさんのいう〝あの子〟は、ひとりだけではない。村から、東京や関西などへ働きに行っている子は、たくさんいる。中学を卒業するとすぐに、都会に就職した子。高校をおえて、村を出て行った子……。

リツばあさんは、大学にはいって、親のしおくりをうけている子のことは、さして心にかけない。思いだすのはきっと、はやくから村を出て、遠いまちへ働きに行った子のことである。

村のお盆は、月おくれの八月。そのお盆がくると、いつもはひっそりとしている村が、いっときの間、にぎやかになる。その子たちが、盆休みに帰ってくるからである。

わざわざ、リツばあさんのところへ、元気な顔を見せにくる子もいる。

見ちがえるようなりっぱな若者になって、都会でのくらしぶりを語っていく子……そんな子はたいてい、目がいきいきとかがやいている。

けれども、毎年のように、さびしい思いもさせられる。それは、村を出て行ったきり、帰ってこない子がいるからだ。中には、親への手紙さえとだえて、どうしているのか、いっこうにわからない子さえある。

（元気でいてくれればいいが……。）

リツばあさんは、帰らない子のことを思うと、心配でたまらない。

新潟県でも群馬県との境に近い小さな村――リツばあさんの住むこの村は、上越線の駅からバスでおよそ一時間、山また山にかこまれた高地だ。バスが通うといっても、一日に二、三回でしかない。それも、きりたった山と谷との間のきけんな道を、くねくね、くねくねと曲がりながら、ようやくたどりつく寒村である。

こんな山深いところにも、近ごろは、人と車の雑とうからのがれようとする都会の人たちが、たまさかにおとずれてくる。いちめんのみどりと、

谷川のせせらぎと、小鳥の声と……そして山あいにたちこめるすがすがしい空気とにさそわれて……。

「なんて、気もちのいいところだろう。こんなところでくらしたいものだ。」

リツばあさんにむかって、そんなふうにいう人もある。失なった〝自然〟をとりもどしたひとときの快い気分で、そういうのだろう。

だが、リツばあさんは、笑って、答えない。

その人たちがおとずれてくるのは、五月から十一月のはじめごろまでだ。みどりをもとめ、あるいは紅葉をもとめてくる人たちに、村に住む人びとのほんとうのくらしはわからない。

このあたりの秋はみじかい。北風が吹いて、かれ葉が散りはじめたかと思うと、山やまのいただきは白くなり、村にはみぞれが降り、それはまたたく間に雪に変わる。

村はたちまち、雪深い山間のへき地となり、よほどの用がないかぎり、都会からたずねてくる人はもういない。そのまま、こ立したように、四メートルもの積雪の中にとじこめられてしまう。

雪のけのブルドーザーも思うようには動けず、家と家との間さえもやっとのことで行きかうような雪国のくらしは、自然のうつくしさをたのしむどころではない。人びとは、冬のきびしさとさびしさに耐えつづけながら、必死に生きるのである。

リツばあさんにとっても、長い冬は、いちばん苦しいときだ。しかも、どんなに苦しくても、リツばあさんは、雪をふみわけ、ふみしめ、山ごえをして歩かねばならない。

「ううっ！　いきだおれになりそう！」

そういいながら、それでも歩く。時には夜になるときもある。若い男の人のかざす明かりに案内されて、ふぶきにうもれた山道を、小さなからだにむちうって歩く……。

なんのために？

リツばあさんは、村の診療所の所長――このあたりではたったひとりの医者なのである。たとえ女医でも、年は老いても、長い病にねたきりの人や、急病で苦しむ人があれば、風が吹こうと雪が降ろうと、行かずにはい

られない。

たったひとりの医者だから、リツばあさんは、このあたりの保育所や小学校や中学校の校医などの仕事も、ひとりでうけもっている。病気になったり、けがをした子はもちろんのこと、子どもたちとはみんな顔見知りなのだ。

三月。学校の卒業シーズンになると、リツばあさんは、卒業する子どもに会うたびにたずねる。

「進学するの？　就職するの？」

就職すると聞くと、行き先や仕事のことをこまかくたずねたあと、子どもの肩に両手をかけて、

「いいかい。」

と、ねんをおすように、こういう。

「からだに気ぃつけてな。どんな苦しいことにぶつかっても、くじけるんじゃないよ。はげしいふぶきの日に、風に向かって学校へ通ったことを思いだせば、負けやしないさ。そうして、いつまでも、この山と、この村を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

忘れないでね。」

いままでに、同じことばをかけて都会へ送りだした子はどれほどいただろう。

夏の盆休みには、その子たちが成長して帰ってくる。

「ああ、もう夏だ。」

六月すえの、雨あがりの空を見て、リツばあさんはつぶやく。

思いだすのは、その子たちのことだけではない。

（むかし、わたしも、風にむかって歩いたっけ。遠い道を。そしていまも、歩いている。）

リツばあさんは、ふと、自分自身の過ぎ去った日をふり返る。村を出て行った子たちの上に、遠いむかしの自分を……〝少女リツ〟のまぼろしを、いつしか空のかなたに、かさねてみるのである。

少女のねがい

大正のはじめ、このあたりのわびしさは、いまどころではなかった。町へ行くまんぞくな道さえなく、山にかこまれ雪にとざされ、人びとは、わずかな田や畑をたよりにほそぼそとくらしていた。東京どころか、近くの大きな町へさえ行ったことのないまま、一生を終える老人もすくなくなかった。

村からひと山こえたとなりの村落で生まれた女の子、リツは、小学校にはいるかはいらないかでもう、家業の手伝いをさせられた。家業は、畑仕事や山仕事もしていたが、おもなものは養蚕で、リツの家は、どちらかといえば、くらしのらくなほうであったろう。

しかし、クワつみ、つんだクワをカイコにたべさせる仕事、マユからの糸とり、その糸そめ……単調な仕事のくり返しでありながら、それは休むことも失敗することもゆるされなかった。もし失敗しようものなら、たち

まち一年じゅうのくらしにひびいた。
家族は多かった。父と母と五人の子どもと、それに叔母たちもいた。リツは、兄ふたり、妹ひとり、弟ひとり、五人兄弟のまんなかであったが、妹といっしょに、小さいときからよく、父母にいわれていた。
「おまえらおなごは、カイコさまの仕事を、はよおぼえねばなんねえ。」
「どっちみち、よめごにいっても、このあたりの百姓になってくらすんだからの。」
家業をつぐ長男をのぞけば、男の子は、女の子とすこしちがっていた。わずかな畑をわけることもできないので、いずれは町へ働きに出ねばなるまいとされていた。
小学校の四、五年生になると、リツは、なんとなく心がくらかった。
「おらはこのまま、一生をこの村でおわるんだろうか。」
もし、山の中で生まれた女の子は、一生を山の中でくらすのがさだめであるなら、それは生まれたときから「希望」という手足をもぎとられたようなものではないか。子どもごころに、そんな疑問と不満がこみあげ、

「おら、あきらめねえよ。」
自分自身にいいきかせるように、山のむこうの遠い空にむかってつぶやく日もあった。
リツの家には、毎年、行商人がやってきた。織物工場に売られる糸やマユを買いにきて、かわりに食料品や日用品を売っていく人たちであった。
宿屋もないこととて、行商人は、リツの家にもよくとまった。
「おじさん、おらの知らない町のことを話してくれや。」
リツは、そういって、あちこちの町をまわって歩く行商人にせがんだ。
「大きな町には、子どもらのよろこぶものがたくさんあるよ。おもちゃでも本でものう。」
「学校もたくさんあるんだろう。」
「あるともさ。」
「働くところもたくさんあるんだね。」
「いろんな会社やお店があるよ。」
「病気になっても、すぐに医者にかかれるんだろう。」

「入院のできる大きな病院もある。」

話を聞くたびに、リツの疑問や不満は高まるばかりであった。

行商人はとまるたびに、読みふるしの雑誌や新聞をおいていった。リツはそれを、すみからすみまでむさぼるように、くり返して読んだ。そこには、知らない町のことがいろいろ書かれていて、リツの小さな胸をいっそう高鳴らせた。

そうするうちに、二番目の兄が、村から遠くはなれた町の中学校（今の男子高校）にはいった。通うことはもちろんできないから、寄宿舎ぐらしになった兄は、休暇のたびに帰ってきた。

「にいちゃん、中学校じゃ、英語も習うんだろう。」

「習うよ。これがその教科書さ。」

兄は、中学校の教科書をあれこれととりだして、勉強のようすを語ってくれた。

「夜になると、寄宿舎の部屋で、みんなで将来のことを話しあうんだ。役人になりたい者、医者になりたい者、村に帰っていつか村長になりたいと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com